

「サンプル」しろうと先生とくろうとノゾミ

※ノゾミと先生のパーソナリティに関する独自の解釈や設定が含まれています。ご注意ください。

先生が煙草を吸う描写がありますが、ノゾミが煙草吸うとかは 아닙니다。

## 一

ノゾミの生活している所からシャーレのオフィスまで行くには、電車に二十分ほど揺られる必要がある。がたん、がたんという音と共に、窓の外の景色が置き去りにされていく。飽きるほど見た、それでも未だに新鮮に感じるその景色を見ていれば、二十分なんてあつという間だ。

「やつほー、先生」

ノゾミの元気な声がオフィスに響く。先生はそれに反応して、回転椅子をノゾミの方へと回す。

「いらつしやい、ノゾミ。早速だけど、当番の仕事をお願いしてもいいかな？」

「おっけー」

少し忙しそうな先生を尻目に、ノゾミは先生の隣のデスクに向かい合つて、シャーレの当番業務を始めた。とはいってもその業務は簡単なものばかりで、ほどなくするとすべてが片付く。外はまだ少し日が傾いたくらいで、まだシャーレに来てから一時間くらいしか経っていない。

「終わったなら、戸棚のお菓子とか食べていいよ」  
手持ち無沙汰なノゾミを見て、先生がそう声をかける

と、ノゾミは「ありがとつ」と、軽快に返事をして、戸棚の方へと一直線。そこからポテトチップの袋を手にとると、オフィスの一角にある休憩スペースの机の上で、それを開けた。ノゾミはニコニコ笑顔でポテチを頬張る。対して先生はまだ忙しそう。ノゾミはポテチを袋から一つ摘まむと、先生の方まで歩いて行って、そのまま先生の口元へとそれを持つていった。

「はい、あくん」

先生がそれに反応して、口を開けて顔をノゾミの方へと近づける。先生の唇と、ポテチの端が互いに触れ合いそうになったところで……ノゾミはそのポテチを自分の口へと放り込んだ。

「あつ」

「ふっふーん」

なんともまあ憎たらしい笑顔を浮かべながら、ノゾミはポテチを頬張る。からかわれた反撃とばかりに、先生はさつ、とノゾミの手にある袋から、ポテチを一つ盗み取る。

「ああっ！ ドロボー！」

先生は「いや、そもそも私が買ってきたやつだから……」とかなんとか、もごもご言いながら口を動かしている。

「ふんだ、先生、椅子にしちゃおっと」

わざとらしくふてくされた素振りをして、ノゾミは先生の方に身体を預けてくる。

「うおっと、お、おも……」

「ちよっと！ レディに重いって言うの、失礼じゃない？！」

「まだまだお子様でしょう、ノゾミちゃん……」

「子ども扱いすんなし〜」

何気ない、生徒と先生同士の会話。

最近のノゾミは、以前よりも増してシャーレを頻繁に訪れるようになった。ハイランダー鉄道学園から、シャーレの付近に新しく路線を敷設する計画を任された……ということで大義名分に、今のノゾミはシャーレのおやつやら、先生と遊ぶやらを満喫している次第だった。

「……どうしたの？」

ノゾミが先生の顔をじっと見つめるのに、先生が反応を返す。「ううん、なんでも」と、またノゾミも返事をする。

「ただ、な〜んか先生の顔、おまぬけだなあって」

「なにっ、シンプルな悪口」

「ほら、ここ、ポテチの食べかすついてる」

「えっ、本当？ あ、ほんとだ……」

「なんか先生、私よりも子どもみたいだね？ 本当におとななの？」

「なにおう……!」

「パヒヤヒヤ、しろうと子どものおまぬけせんせ〜」

ひとしきりからかってやると、先生は苦い顔をして、少しだけ肩を落とした。

ノゾミと先生の関係性もだいたい長いことになっていて、ノゾミは先生の様々な面を知っていた。可愛いものが好きだとか、抜けている一面があるだとか……みんなの憧れのシャーレの先生も、先生のことを良く知るノゾミの目にはただの一人の大人に見える。そんな先生にくっついてたり、からかったりしてやるのは、誰も、本人にも気づかないところで、静かにノゾミの優越感を満たしていた。

またある日、ノゾミがシャーレに、特に理由は無けれど遊びに来た日の事であった。

「せんせ、遊びに来た……よ……」

先生が回転椅子に体重を預けて、こう……ものすごい体勢で眠っていた。先生の身体の半分は椅子からずり落ちていて、背もたれの根元に頭があった。パソコンの画面はついたままで、先生の目元には深いくまがあった。大方徹夜で作業をしていて、そのまま寝落ちてしまった

のであらうということは、容易に見当がついた。

「あれま……」

ノゾミは小さくため息をつくとき、見てしまったものは仕方ないと、先生の身体を持ち上げて、仮眠室の方へと連れて行った。キヴォトスの生徒の勢力があれば、成人男性を一人持ち上げるくらいはなんてことはない。たとえそれが小柄なノゾミであっても。

先生をベッドに寝かせてやると、険しかった寝顔がいくらか柔らかくなった。一仕事を終えたノゾミは、さてどうしたものかと思案した。折角シャーレに來たけれど、このままだと何もせずに帰ることになりそう。手持ち無沙汰なのを誤魔化すように、窓の外の景色に目を遣つて、ああ今日はちよつと曇つてゐるなあ、とか中身の無いことを考えた後に、眠っている先生の方に視線を戻して、その頬を指でつついてみた。した。

とりあえず写真でも撮つて、後でまたからかつてやろう……ノゾミは自分のスマホを構えて、先生の寝顔と一緒に自撮りをした。少しばかり悲壮感の漂う疲弊した先生の寝顔も、フィルターを通すとなんだか少し間抜けに感じる。満足してスマホをしまうと、ノゾミはひとつ、大きなあくびをした。そして、今朝もあくびを噛み殺しながら、早い時間から運転の仕事についていたことを思

い出した。

目の前には人肌で温まりつつあるベッドがひとつ。ノゾミがやるべきことも、ただひとつ……

「おじゃましましす……」

ノゾミは上着やら帽子やら、眠るのに邪魔な衣類をあらから取つ払つて、そして先生のために添い寝してあげる、という大義名分を掲げながら、おそろおそろ先生の眠るベッドの中へと入る。二人で寝るには少し狭いベッドだった。自然とノゾミは、身体を先生の方に寄せざるを得なくなる。先生からは、他のどの生徒からも感じられない、「おとなの匂い」がした。ノゾミは先生のこの匂いが、ほんの少しだけ好きだった。

その時ちよつと、先生がゆつくりと寝返りを打つて、ノゾミと向きあうような横向きの体勢になった。急に目の前にやってきた先生の顔を、ノゾミはじつと見つめる。自分の感情であるはずなのに、ノゾミは自分自身が目の前の大人にどんな感情を向けているのかを量りかねていた。

私はこの大人をどうしたいんだろう？ 自分のものでしたいのか、愛したいのか、それとも傷つけたいのか。先生の頬を何の気なしに撫でる。髭の剃り跡が指に引っかかった。ただ、今この時は、眠りこける先生を、私は

好きなようにできる。その事実だけがある。ノゾミの背筋がぞくりとした。

シャーレに入り浸れて、みんなの憧れの先生と仲良くできているだけ、私はずいぶん幸せだ……多分もう、それで十分だと、ノゾミの脳は考えるのが面倒になったのか、そう結論付けた。そうすると急に眠気が襲ってきて、ノゾミは意識を手放した。先生の身体をぎゅっと抱きしめながら、先生が私の抱き枕なのか、私が先生の抱き枕なのか、分かんないな……なんてことを思いながら。

ノゾミは眠りにつきながら、「泥のように眠る」という言葉を思い出していた。曖昧な感情が、身体から泥みたいにねばついた液体のように染み出して、ベッドの温もりの中で、先生と自分が混ざり合うかのような感覚があった。

その後、目を覚ました先生が、自分がノゾミに手を出してしまったものだど勘違いして必死に謝ってきた。一から先生に説明して、取り乱す先生をなだめてやるのに、ノゾミはたいそう苦勞した……

## 二

いつものように、ノゾミはその日もシャーレを訪れた。先生はオフィスにはいなかった。忙しいあのおとなの事だから、大して珍しいことでもない。戸棚からお菓子を取り出そうとして、この前の寝落ちしていた先生のことを、ノゾミは思い出した。

今日は当番ではないけれど、私ができそうなお仕事ぐらいは手伝ってあげようかな……身体を翻してデスクの方に向かって、積みあがった書類の一束を手にとった。しばらく書類の整理をしていると、シャーレオフィスの窓越しに、シャーレに戻って来る先生のような人影が見えた。しかし、その影はシャーレの入り口に向かうのではなく、ビルの裏手へと吸い込まれていってしまった。もしあれが先生だとしたら、何をしにそっちの方へ行くんだろう？ ノゾミは気になって仕方がなくなってしまう、先生らしい人影の方へとついて行ってみることにした。ビルの外では冷たい北風がひゅると音を立てていた。ノゾミは足早にビルの裏手へと駆けていった。いつも綺麗なシャーレのビルの中と比べると、当然と言えは当然だけれど、そこは綺麗な場所とは言えなかった。街の汚いところをスポイトで吸い取って、それを一

滴垂らしたかのような、ほんの少しだけ心がざわざわる匂いがした。そんな匂いの中に、一つ覚えのある匂いがあった。先生の「おとなの匂い」だった。

奥で先生が立っていた。先生は見慣れない、銀色の台のようなものの傍に立っていて、これまた見慣れない、棒のようなものを指で挟んでいた。その棒の先端は橙色に燃えていて、そこから灰や煙の白が、湧き上がっては消えていた。

「の、ノゾミ……？」

その棒——紙煙草からは、強い「おとなの匂い」がした。た。

・以下、後半のえっちシーンより抜粋

何度もノゾミに触れた先生のでのひらが、再びノゾミに触れた。何度もノゾミが見た先生の端麗な顔が、ノゾミの視界に収まった。ノゾミの頭の中に積みあがっていたものが、ゆっくりと崩れていった。

ノゾミはそのまま、目の前の唇を奪った。

ノゾミが突然キスをしてくることくらいなら、今の先生とノゾミの間では大して珍しいことではなかった。しかし今回のそれはいつもとは違った。そこに込められていたのは親愛ではなくて、寸分違わず性愛。

「ちゅ……♡　ちゅぷ……♡くちゅ……♡

交わり、というよりは捕食だった。先生の内側にあるものをしゃぶりつくさんとばかりに、ノゾミは先生に舌を絡めて、目の前のおとなの精を味わった。一度も吸ったことのない煙草の味がするような、さつき分けてあげたポテチの味がするような、やっぱり何の味もしないような。しかし、今の飢えたノゾミには、何より甘い、キスの味。

どれほど長いキスだったろう。ノゾミが口を離すと、先生はすっかり息を切らしていた。ノゾミの身体の火照りが移ったかのように、先生は頬を赤らめて、ノゾミと

同じ「欲」を抱いていた。

ノゾミはおもむろに、傍に置いてあった自分のカバンの底をまさぐって、いつぞや買ったコンドームを取り出した。

「ねえ、せんせ」

その小さな赤い箱を、ノゾミはおずおずと自分の前に差し出した。

「今日は、これであそばさ……？」

もはやノゾミの頭の中に、さつきまで考えていた我慢とか、体裁とかのことはどこにもなくて。

シャーレのオフィスには、発情しきった男と女、その二人だけが居た。

\* \* \* \* \*

「ちゅ……♡　んちゅ……♡」

仮眠室に場所を移してからも、ノゾミと先生はしばらくキスばかりしていた。

甘味を吸いつくした後に、ノゾミは先生のズボンに手をかけた。露出した先生の陰茎はすっかり硬くなってい

た。今まで嗅いだことのない匂い。感じたことのない味。しかしそれも、確かに甘かった。反り立ったそれに、何度も何度も、ついに甘くキス。

「の、ノゾミ……っ♡」

ノゾミの唇がペニスに触れるたびに、先生にとろけるような快感が先生に走る。その快感に先生が身体を震わせるのを見ると、ノゾミはとても嬉しくなった。

そのうち我慢汁が亀頭から垂れてきて、ノゾミはそれをべろりと舐めた。美味しいはずのないその体液が、ノゾミにはこれ以上ないくらいに美味しく感じられる。

先生のペニスを隅々まで味わおうと、ノゾミは舌を絡める。亀頭の先、カリ首の裏、根元のあたり……どこを刺激しても、声を漏らしたり、身体を震わせたり、先生は面白いくらいに反応を返してくる。

「よわよわだね、せんせ……♡」

甘く爛れたようなノゾミの声が、先生の鼓膜を撫でると、さらにペニスが硬くなった。ノゾミはそのペニスを、喉奥まで咥えこむ。

くぼっ♡ くぼっ♡ くぼっ♡  
ぐちゅぐちゅ……♡ れろ……♡

先生にもっと気持ちよくなつてほしい。もっと先生の  
中身——情けないところを見せてほしい。

「ちよっ、いきなりっ……♡」

初めてのはずなのに上手すぎる口淫。あまりの気持ちよさに、先生は思わずノゾミの頭を掴んでしまう。そんなことでノゾミが止まるはずもないのに。

ぐぼっ♡ くぼっ♡

じゅるるっ♡ れろっ♡

フェラの勢いはさらに増して、水音が仮眠室に鳴り響く。仕事の忙しさから処理を怠っていた先生のペニスは、酷な刺激だった。先生はもう、限界が近い。

「ノゾミ、ノゾミ……♡」

先生に名前を呼ばれるたびに、ノゾミの身体は熱くなって、さらにフェラは激しくなる。

「んう……♡ へんへ、だひて、だひて……♡♡♡」

「だ、だすよ、ノゾミっ……♡」

どぶっ……♡ びゅるるるうっ……♡  
びゅるっ♡ びゅくっ♡



ノゾミの口の中で、先生の精が撒き散らされた。ノゾミはそれを一滴も逃すまいと、根元から先までチンポを舐めとる。ノゾミが口を離すと、ちゅぽ……♡と淫靡な音が鳴って、そして、ぐちゅぐちゅ……♡と、精液を咀嚼する。先生が止める間もなく、ノゾミはそれをごくんと飲み込んだ。

苦いし、くさい。でもそれは、ノゾミの飢えをこれ以上なく満たした。

「んあ……♡」

ノゾミは口を広げて、精液を飲み干したことを先生に見せつけた。これでもかと男の情欲を煽る仕草に、先生の逸物は萎えることを知らない。

ノゾミはポケットに入れていたコンドームを取り出して、包装を剥いた。ピンク色のそのゴムを、丁寧に先生のペニスに被せる。これから起こることを予感させるようなその儀式的な行為に、ノゾミは期待感を募らせた。